

# 青少年の組織キャンプ技術と日常生活技術の習得についての事例研究 —両技術の習得時期の関係の検討—

白木 賢信  
(東京家政大学)

## 【要旨】

本論文は、事例分析により、青少年の組織キャンプ技術と日常生活技術の習得時期の前後関係を明らかにすることを目的とする。分析の結果、今回の事例に関していえば、両技術の習得時期の前後関係は、①日常生活技術の習得時期が先でキャンプ技術の習得時期が後の場合の方が、②キャンプ技術の習得時期が先で日常生活技術の習得時期が後の場合より多くなっている。両技術に適用される技術操作法としては、安全操作法、効率操作法、工夫操作法の3タイプが析出できたが、①および②の特徴の違いとしては、①の場合は効率操作法と安全操作法がほぼ同じくらいで、②の場合は安全操作法が若干多かった。両技術の習得については、このような技術操作法がかかわっているのではないかと思われる。

## 1. 目的

本論文は、青少年の組織キャンプで使われる生活技術（以下、キャンプ技術と表記）と、それとかわりのある日常生活で使われる生活技術（以下、日常生活技術と表記）の習得時期の関係を明らかにしようとするものである。

この問題についてのこれまでの検討では、キャンプの継続的参加者の事例でみる限り、キャンプ技術の習得時期はキャンプ参加者がキャンプに参加し始めてから約4年以内がほとんどで、日常生活技術の習得時期は最初のキャンプ参加後約3年以降に集中していた<sup>1)</sup>。しかし、両技術の習得時期がどのような関係にあるのかを解明することが、課題の一つとして残されていた。両技術の習得時期の関係にはさまざまなものが考えられるが、本論文では、それを両技術に適用される操作的な技術で繋ぐことのできるものにしぼり、(1)両技術に適用される操作的な技術の発見および(2)(1)の操作的な技術のタイプの違いによる両技術の習得時期の前後関係の特徴を事実発見的に探ることにした。

## 2. 研究方法

上述の目的で述べた(2)の特徴を探るためには、キャンプ技術と日常生活技術それぞれの習得時期を捉えるこれまでの枠組を発展させて、キャンプ技術と日常生活技術の両方に適用される操作的な技術を枠組に取り入れる必要がある。

例えば、キャンプ技術の一つである「なたによる薪の割り方」の場合を例に挙げると、なたや薪はキャンプでは使われるが日常生活ではほとんど使われないので、「なたによる

薪の割り方」は、キャンプ技術として使われても日常生活技術としてはあまり使われないと考えられる。今回は行わないが今後、習得されたキャンプ技術の効用として日常生活技術が何か習得されるのか、あるいはキャンプ技術の習得に対して過去に習得された日常生活技術の影響があるのかなどを検討していくためには、キャンプ技術「なたによる薪の割り方」と日常生活技術「ナイフや包丁の使い方」の両方に適用される「刃物の操作法」や「切る材料を押さえる手の操作法」の検討を行う必要が生じるように思われる。そこで今回はその点に着目し、両技術に適用される技術操作法<sup>2)</sup>を取り入れた枠組を設け(第1表参照)、事例分析を行うことにした。事例分析のための調査の概要は第2表の通りである。

第1表 分析の枠組

生活の機能的領域 <sup>3)</sup>		習得されたキャンプ技術 <sup>4)</sup> (下記は質問紙調査で取り上げたキャンプ技術)	技術操作法 (下記は具体例)	習得された日常生活技術 (下記は具体例)
生 的 機 能 維 持 の 領 域	食に関する(特に準備/後片づけにかかわるもの)	(a)なたによる薪の割り方	刃物の操作法	ナイフや包丁の使い方
		(b)かまどの火の扱い方	火への対処法	ガスの火の扱い方
		(c)かまどの周りの片づけ方	作業手順の調整法、道具活用法	台所の周りの片づけ方
	食に関する物質的満足(特に衛生にかかわるもの)	(d)生ゴミの処理の仕方	食べ残しの処理方法	生ゴミの処理の仕方
		(e)生ゴミ以外のゴミ処理の仕方	食べ残し以外のゴミの処理方法	生ゴミ以外のゴミ処理の仕方
		(f)食料・調味料の保管の仕方	食料の保管法	冷蔵庫の食料の見分け方
	衣に関する物質的満足	(g)防寒着などの調整の仕方	天候に合わせた衣服の着用法	上着の着方

第2表 調査の概要

<p>(1) 調査内容 キャンプ技術および日常生活技術の習得の有無および習得時期、習得されたキャンプ技術と日常生活技術に適用される技術操作法、属性(氏名、学年、性別)、キャンプ参加歴、他</p> <p>(2) 調査対象 青少年の組織キャンプ参加者</p> <p>(3) 被調査者(サンプル) 1)質問紙調査 静岡県キャンプカウンセラー協会主催の組織キャンプ(キャンププログラムについては第3表を参照)の参加者(小学5年生～高校生)71人 サンプルの回収状況 回収数・有効回収数は共に68で、体調不良等の理由で配付不能となった3票を除く調査可能なサンプル68に対する回収率・有効回収率は共に100%であった。</p> <p>2)面接調査 1)質問紙調査でキャンプ技術の習得度の高い順にキャンプ参加者8人を抽出 サンプルの抽出方法 ①8月に行った1)質問紙調査の各キャンプ技術について、「やった」が7項目中5項目以上あった11サンプルを抽出した。 ②①で抽出された11サンプルのうち、「やった」キャンプ技術について「いつもできた/した」が70%以上あった9サンプルを抽出し、そのうち最も学年の低い中学1年生を除く8サンプルに絞った。</p> <p>(4) 調査方法 1)質問紙調査 質問紙による配付回収法 2)面接調査 面接法(自由面接法)</p> <p>(5) 調査時期および場所 1)質問紙調査 2002年8月22、23、27、28日(第3表を参照)、 静岡県立朝霧野外活動センターキャンプ場(静岡県富士宮市)</p> <p>2)面接調査 第1回:2002年9月23日、被調査者の自宅(静岡県島田市) 第2回:2002年9月28日、被調査者の自宅(静岡県沼津市) 第3回:2002年9月28日、静岡市中央公民館(静岡県静岡市)</p>
---

- 第4回: 2002年9月29日、静岡市中央公民館(静岡県静岡市)  
 第5回: 2002年9月29日、静岡市中央公民館(静岡県静岡市)  
 第6回: 2002年10月5日、清水市民文化会館(静岡県清水市(当時))  
 第7回: 2002年10月6日、清水市民文化会館(静岡県清水市(当時))  
 第8回: 2002年10月12日、浜北市生涯学習センター(静岡県浜北市)

(6) 面接調査の被調査者のプロフィール

- 第1回被調査者(以下、被調査者A): 中学2年・男子・キャンプ初参加は1999年  
 第2回被調査者(以下、被調査者B): 中学2年・男子・キャンプ初参加は2002年  
 第3回被調査者(以下、被調査者C): 高校1年・男子・キャンプ初参加は1998年  
 第4回被調査者(以下、被調査者D): 高校3年・女子・キャンプ初参加は1995年  
 第5回被調査者(以下、被調査者E): 高校3年・女子・キャンプ初参加は1995年  
 第6回被調査者(以下、被調査者F): 高校3年・女子・キャンプ初参加は1995年  
 第7回被調査者(以下、被調査者G): 高校3年・男子・キャンプ初参加は1997年  
 第8回被調査者(以下、被調査者H): 高校1年・女子・キャンプ初参加は1998年

第3表 質問紙調査の被調査者の参加キャンププログラム(質問紙調査の日程も含む)

月日	参加コース	午前	午後	(夜)	質問紙調査
8月17日 (1日目)	B コース		入所、設営	キャンプファイアー (ウェルカムファイアー)	
8月18日 (2日目)		グループ(班)別活動①	沢遊び、サイクリング、酪農体験、クラフト、レクリエーションゲームなどの活動をグループ(班)ごとに分かれて実施した。		
8月19日 (3日目)		グループ(班)別活動②			
8月20日 (4日目)		選択プログラム①	各参加者(被調査者)は、溪流釣り、沢遊び、マウンテンバイク、火おこし、ウッドクラフト、アウトドアクッキングなどから各日1活動を選択し実施した。		
8月21日 (5日目)		選択プログラム②			
8月22日 (6日目)	A コース	休養	料理博覧会準備	料理博覧会	調査(被調査者: Bコース参加者)
8月23日 (7日目)		Bコース参加者退所	グループ(班)別活動③		
8月24日 (8日目)	C コース	グループ(班)別活動④ 遠征準備			
8月25日 (9日目)		遠征(行き)	キャンプ場→一本木林道→大沢崩れ(14km)	露營(ビバーク)	
8月26日 (10日目)		遠征(帰り)	大沢崩れ→一本木林道→キャンプ場(14km)		
8月27日 (11日目)		演芸会	キャンプファイアー (ファイナルファイアー)		
8月28日 (12日目)		撤収、清掃	退所		調査(被調査者: Aコース参加者・Cコース参加者)

注) 期間: 2002年8月17日~28日

場所: 静岡県立朝霧野外活動センターキャンプ場およびその周辺

### 3. 研究結果と考察

まず、目的で挙げた(1)の特徴について、技術操作法を枠組で析出したものが第4表である。今回の事例に限るものであるが、これらを類型化してみると、刃物を使うときにかかわる「切る材料を押さえる手の操作法（手袋の使用法、手の置き方）」や「火への対処法（火との距離の取り方、使用後の処理法）」など安全に作業をするための技術操作法（以下、安全操作法と表記）、片づけのときの「作業手順の調整法（複数で行うときの役割分担の仕方、段取りの決め方）」「道具活用法（ゴミ箱の活用法、整理箱の活用法）」などの作業を効率的に進めるための技術操作法（以下、効率操作法と表記）、「材料の操作法（切り口の設定法、材料の置き方）」「燃料の使用法（量の調整法、形の変え方）」などの材料・道具を工夫するための技術操作法（以下、工夫操作法と表記）の3タイプとなる。

第4表 習得されたキャンプ技術と日常生活技術および両技術に適用される技術操作法

No	習得されたキャンプ技術	技術操作法	習得された日常生活技術
1	(a) なたによる薪の割り方	切る材料を押さえる手の操作法（手袋の使用法、手の置き方）、材料の操作法（切り口の設定法、材料の置き方）、刃物の操作法（作業速度の調整法、使用後の刃物の置き方）、作業場所の設定法	のこぎりの使い方、包丁の使い方、包丁の片づけ方、カッターナイフの使い方、なた／おのの使い方
2	(b) かまどの火の扱い方	燃料の使用法（量の調整法、形の変え方）、火への対処法（火との距離の取り方、使用後の処理法）、作業場所の設定法	台所コンロの火の調整の仕方、野外炊事（学校行事）でのかまどの火の扱い方、バーベキューの火の扱い方、花火の火の扱い方、風呂釜の火の扱い方
3	(c) かまどの周りの片づけ方	作業手順の調整法（複数で行うときの役割分担の仕方、段取りの決め方）、道具活用法（ゴミ箱の設置法、整理箱の活用法）	家の中の片づけ方、部屋の片づけ方、家／学校の掃除の仕方、ロッカー・机の中の整頓の仕方、プリントの片づけ方
4	(d) 生ゴミの処理の仕方	分別用のゴミ袋の活用法	生ゴミの分別の仕方
5	(e) 生ゴミ以外のゴミ処理の仕方	分別用のゴミ袋の活用法、使用済プリントの活用法、缶ゴミの処理法（缶の潰し方）	ゴミ（生ゴミ以外）の分別の仕方、ゴミの減らし方、缶ゴミの処理の仕方
6	(f) 食材・調味料の保管の仕方	賞味／消費期限の管理法	冷蔵庫内の食材の管理の仕方
7	(g) 防寒着などの調整の仕方	衣服袋使用法、下着の利用法、重ね着の仕方	衣類の出し入れの仕方、寒いときの衣服の着方

次に、目的の(2)の特徴であるが、キャンプ技術の習得と日常生活技術の習得時期の検討結果を示したものが第5表なので、先にこの表についてNo.1を例に説明しよう。No.1では、被調査者Bに関する、キャンプの「なたによる薪の割り方」とそれとかかわりのある日常生活技術の習得時期を示すもので、被調査者Bが、キャンプの「なたによる薪の割り方」を2002年頃(被調査者Bが中学2年生の頃)に習得し、それとかかわりのある日常生活技術「なた・のこぎりの使い方」「包丁の使い方」を1995年頃(被調査者Bが小学1年生の頃)に習得したことを示している。

同種類のキャンプ技術ごとに見てみると、No.1～4の「なたによる薪の割り方」、No.5～8の「かまどの火の扱い方」、No.9～13の「かまどの周りの片づけ方」は、生活の機能的領域でみれば、特に準備や後片づけにかかわる食に関する物質的満足を維持する技術である。これらの技術に関しては、キャンプ技術の習得前に習得される日常生活技術とキャンプ技術の習得後に習得される日常生活技術はほぼ同じである。次に、No.14～26の「生ゴミの処理の仕方」「生ゴミ以外のゴミ処理の仕方」「食材・調味料の保管の仕方」、つまり特に衛生にかかわる食の物質的満足を維持する技術をみると、ここではほとんどがキャンプ技術の習得前に日常生活技術が習得されている。さらに、衣に関する物質的満足を維持するための「防寒着などの調整の仕方」(No.27～31)では、キャンプ技術の習得前に習得される日常生活技術とキャンプ技術の習得後に習得される日常生活技術はほぼ同じになっている。

このような習得時期をキャンプ技術と日常生活技術の習得時期の前後関係の違いで検討するために、キャンプ技術の習得時期が先で日常生活技術の習得時期が後の場合を<キャンプ→日常生活>と表し、日常生活技術の習得時期が先でキャンプ技術の習得時期が後の場合を<日常生活→キャンプ>と表すと、<キャンプ→日常生活>の場合の技術操作法は、安全操作法(例:切る材料を押さえる手の操作法)にやや偏っている。この場合の被調査者のプロフィールの特徴は、キャンプ参加年数が多いことで、おそらくキャンプに繰り返し参加するうちにキャンプ技術を習得していると考えられる。逆に<日常生活→キャンプ>の場合に見られる技術操作法は、効率操作法(例:衣類袋使用法や作業手順の調整法)と安全操作法(例:火への対処法)の2タイプである。こちらの場合の被調査者は、どちらかというともキャンプ経験年数が少ない方である。なお、キャンプ技術と日常生活技術の習得時期の前後関係が不明なものに関しては、工夫操作法(例:材料の操作法)が挙げられている。

このような結果を結論的にまとめれば、次の2点が考えられるであろう。それは第一に、キャンプ技術と日常生活技術の習得時期の前後関係の違いが見られるのは、安全操作法が適用される技術の習得がかかわる場合であること、第二に、<日常生活→キャンプ>という前後関係となるには安全操作法に加え効率操作法が適用される技術が習得される場合であることである。ただしこれは、あくまでもわずかな事例の分析からの結論であるので、今後さらなる検討を加えていくことが必要であろう。

#### 4. 今後の課題

今回は、生活の領域も限定した事例分析であったので、前述したような検討を加える場合、その対象を生活の別領域に拡大していく必要もあろう。そして、各種技術操作法をどのように身につけているのかを捉えることのできる枠組も作成していく必要があると考えられる。

その他の課題としては、キャンプ参加者の生活環境的な条件なども加えて検討していくことも挙げられるであろう。他にも課題は挙げられるであろうが、上述の課題がまず取り組まなければならない課題であると考えられる。

第5表 習得されたキャンプ技術と日常生活技術の習得時期

No	生活の機能的領域	被調査者	キャンプ技術習得前に習得された日常生活技術	習得の時期(学年)	習得されたキャンプ技術	習得の時期(学年)	キャンプ技術習得後に習得された日常生活技術	習得の時期(学年)
1	生物的機能維持の領域 食に関する物質的満足(特に準備/後片づけにかかわるもの)	B	なた・のこぎりの使い方/包丁の使い方	1995年(小1)頃	なたによる薪の割り方	2002年(中2)頃		
2		H	包丁の使い方	1997年(小5)頃		1998年(小6)頃		
3		C				1998年(小6)頃	のこぎりの使い方	1999年(中1)頃
4		E				1995年(小5)頃	包丁の片づけ方	不明
5		B	台所コンロの火の調整の仕方/野外炊事(学校行事)でのかまどの火の扱い方	1995年(小1)頃/2001年(中1)頃	かまどの火の扱い方	2002年(中2)頃		
6		H	台所コンロの火の管理の仕方	1997年(小5)頃		2000年(中2)頃		
7		C				1998年(小6)頃	バーベキューの火の扱い方	1999年(中1)頃
8		E				1995年(小5)頃	バーベキューの火の扱い方/台所コンロの火の扱い方/花火の火の扱い方	不明
9		A	家の中の片づけ方	不明	かまどの周りの片づけ方	2002年(中2)頃		
10		B	家の中の片づけ方	1999年(小5)頃		2002年(中2)頃		
11		C	家の中の片づけ方	1999年(中1)頃		2002年(高1)頃		
12		F	部屋の片づけ方	1998年(中2)頃		2000年(高1)頃		
13		H				2000年(中2)頃	家の掃除の仕方	2002年(高1)頃

No	生活の機能的領域	被調査者	キャンプ技術習得前に習得された日常生活技術	習得の時期(学年)	習得されたキャンプ技術	習得の時期(学年)	キャンプ技術習得後に習得された日常生活技術	習得の時期(学年)	
14	食に関する物質的満足(特に衛生にかかわるもの)	A	家の生ゴミの処理の仕方	不明	生ゴミの処理の仕方	1999年(小5)頃			
15		F	生ゴミ(学校の調理実習)の減らし方	1994年(小4)頃		1995年(小5)頃			
16		G	生ゴミ(家/学校)の処理の仕方	不明		1997年(中1)頃			
17		H	家の生ゴミの処理の仕方	1996年(小4)頃		1998年(小6)頃			
18		D				1995年(小5)頃	生ゴミの分別の仕方	2000年(高1)頃	
19		E				1995年(小5)頃	生ゴミの分別の仕方	2000年(高1)頃	
20		A	生ゴミ以外のゴミ(家)処理の仕方	不明		生ゴミ以外のゴミ処理の仕方	1999年(小5)頃		
21		G	生ゴミ以外のゴミ(家/学校)処理の仕方	不明			1997年(中1)頃		
22		H	缶ゴミ(家)の処理の仕方	1996年(小4)頃			1998年(小6)頃		
23	E			1999年(中3)頃	ゴミ(生ゴミ以外)の分別の仕方		2000年(高1)頃		
24	F	冷蔵庫(学校の調理実習)内の食材の管理の仕方	1995年(小5)頃	食材・調味料の保管の仕方	2000年(高1)頃				
25	G	家の冷蔵庫内の食材の管理の仕方	不明		2002年(高3)頃				
26	H	家の冷蔵庫内の食材の管理の仕方	1996年(小4)頃		2000年(中2)頃				
27	衣に関する物質的満足	A	衣類の出し入れの仕方	不明	防寒着などの調整の仕方	2001年(中1)頃			
28		G	通学用雨具の着方/運動後の着替え方	2000年(高1)頃		2002年(高3)頃			
29		H	上着の着方	不明		1998年(小6)頃			
30		C				1999年(中1)頃	防寒着(通学用)の調整の仕方	2002年(高1)頃	
31		F				1997年(中1)頃	寒いときの衣服の着方	2000年(高1)頃	

注記・引用文献

- 1) 拙稿「青少年の組織キャンプで使われる生活技術の習得時期—事例による検討—」(『日本生涯教育学会論集』23、pp.125-132、2002)。
- 2) 技術を最広義に捉えれば一定の目的に達するための行動の仕方であるが(馬場敬治『技術と社会(第1巻)(馬場敬治著作選集Ⅶ)』(酒井書店・育英堂、1970(初版1936))p.7)、経営学では、広義の技術を、いわゆる技能と呼ばれるような属人的な能力と、どのような実践活動にも適用される客体的な方法・技法としての技術によって構成されると捉え、そのうち後者を狭義の技術とする立場がある(宗像正幸「技術」(神戸大学大学院経営学研究室編『経営学大辞典 第2版』(中央経済社、1999(初版1988)、pp.166-167))、宗像正幸『技術の理論—現代工業経営問題への技術論的接近—(工業経営研究叢書Ⅰ)』(同文館、1989) pp.128-129を参照)。ここで言われている狭義の技術の中に、技術を客観的な操作の仕方、方法の面から捉える操作方法が挙げられている(宗像正幸『技術の理論—現代工業経営問題への技術論的接近—(工業経営研究叢書Ⅰ)』p.140)。今回はこの考え方をを用いて、技術操作法を、キャンプ技術にも日常生活技術にも適用される操作の仕方と捉えることにしたい。また、上述の操作方法に近いものの一つに管理技術があり、これを技術を構成する要素の一つとする組織論的な立場もあり(林武『技術と社会—日本の経験—』(東京大学出版会、1986))、組織的に運営されるキャンプを対象とする本研究では今後必要となる考え方ではあるが今回は取り上げない。管理技術については、貫隆夫『管理技術論』(中央経済社、1982)、川端久夫「生産技術・経営技術・管理技術—片岡信之、貫隆夫の見解に聞説して—」(『経済学研究』55(6)、pp.9-30、1990)などを参照。
- 3) Bennett, John W. & Tumin, Melvin M., *Social Life: Structure and Function*, Alfred A. Knopf, New York, 1949, pp.45-59 参照。これをもとに作成した青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組については、拙稿「青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組」(『日本生涯教育学会論集』19、pp.57-66、1998)を参照。
- 4) 習得されたキャンプ技術をどのように捉えるかについて、キャンプ技術を実際に使ったかどうかという区別と、実際に使ったとしても、それができたのかできなかったのか、あるいは常に使ったのか使ったり使わなかったりであったのかという区別をする必要があるので、今回は次のような手順で捉えることにした。
  - ①事例のキャンプで、キャンプ技術を使う作業を1回でも実際に「やった」か「やらなかった」のどちらかで捉える。
  - ②①で「やった」場合、(a)(b)については「いつもできた」「できたりできなかったりだった」「1回もできなかった」のいずれかで捉え、(c)～(g)については「いつもした」「したりしなかったりだった」のどちらかで捉える。なお、この基礎的な集計結果については、日本生涯教育学会第23回大会研究発表資料「青少年の組織キャンプ技術と日常生活技術の習得の関係」(2002年11月17日、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター)を参照。